

緊急情報(アルゼンチンアリ京都市内で発見)

「衛生動物だより第48号」でアルゼンチンアリを取り上げました。その中で、アルゼンチンアリは、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」の中で特定外来生物に指定されていること、他のアリを駆逐し、生態系を変えてしまう可能性があることを説明しました。そのアルゼンチンアリが早くも京都市内(伏見区)で確認されました。

検査依頼

PCO(害虫防除業)業者からの依頼です。「顧客からアリの相談を受けた。アルゼンチンアリではないか。」との相談です。「アルゼンチンアリは、非常に有名なアリですが、そんなに簡単には見つからないですよ。」と答え、標本を受け取りました。検査依頼された標本のアリを「日本産アリ類全種図鑑(株式会社学習研究社発行)」の検索表に基づいて、顕微鏡下で各部を調べました。結果は、アルゼンチンアリに行き着きました。

現場調査

検査依頼された個体が少なかったため、相談のあったPCO(害虫防除業)業者に同行を依頼し、現場調査を行いました。多くの標本が採集できました。12月16日のことです。気温の低い時にもかかわらず、活発に動き回り、ブロックの隙間に入り込んでいました。冬季に活発に活動するのは、アルゼンチンアリの特徴の一つです。また、管理者からの話を聞くこともできました。「数年前から見かけている。夏になると大量に発生し、屋内にも頻繁に侵入してくる。」とのことでした。こうした話の内容もアルゼンチンアリの被害の特徴と一致します。

検査結果

京都市内で初めての生息の確認の記録となると、図鑑からの情報だけで種類を特定するのは、多少、不安が残りました。幸いなことに、日本で最初にアルゼンチンアリを発見された杉山隆史氏から譲り受けた広島県廿日市市産の標本がありました。この標本と比較することにしました。当然ですが、各部の形態は、見事に一致しました。こうしたことから、アルゼンチンアリと特定できました。

アルゼンチンアリの形態の特徴

ここに掲載している画像は、すべて伏見区で採集されたアルゼンチンアリのものです。

アリは、ハチの仲間です。他のハチの仲間との違いは、腹部に腹柄と呼ばれる器官があることです。さらに、腹柄の数、形は重要な鑑別点です。腹柄は、1節で薄いコブ状です。大きさは、前伸腹節の気門の位置を越えません。

腹部末端の開口部は、割れ目状です。こうした形態は、カタアリ亜科の仲間の特徴の一つです。体色は、黒褐色です。脚は、多少、色が薄れます。複眼は大きく、頭部の背面の前方にあります。胸部は、細長く、横から見て穏やかな弧(こ)を描きます。触角は、細長く、12節からなります。さらに、大あごの歯の特徴は、図鑑に記載がありませんでしたが、広島の標本と比較すると一致していました。

調査依頼

在来のアリの多くは、冬季に巢外で活動することはありません。冬季に活動している小さなアリを見つけたならアルゼンチンアリである可能性があります。京都市内の汚染状況を確認したいと思いますので、発見場所を衛生動物部門まで御連絡ください。

